

## 救護活動

北九州市小倉北区

大西 アツ子

昭和20年8月、第2次世界大戦は益々激しくなり、国民を震え上がらせた。私も銃後の国民として何か役立つ事をしたいという思いから、看護婦養成所に入所した(国立帖佐療養所内)。学生2年の時、空襲警報は、ひっきりなしに私達住民へ避難の合図をする。その度に防空壕へ避難するのです。防空ズキンとモンペ姿で白衣等着用しては入られない。ある時防空壕に入るや否や敵機が現れ、豆鉄砲みたいに機銃掃射を受け、病院の神棚の盃が破損したり、キュウスの口が飛んだり、後で驚く有様でした。考えますと早く戦争を止めろという威嚇射撃だったのでは。

学習も空襲空襲で十分にできず、学生活動は患者さんを防空壕へ避難誘導のみのように記憶しています。そうした私達に、突然、救護班として出動するように命令が出された。場所は鹿児島市内の山手で防空壕の負傷者収容所である。次から次へと運び込まれ、看護の手を待っていた。「痛いよー」「早く何とかして」と、力なく泣き叫び助けを求めていた。その様子を目前にして、私達は驚きと戸惑いで迷いました。この場には的確に指示を与えてくれる人もなく、傷口を消毒したり、清潔ガーゼで固定する処置を次々に繰り返した。薄暗い防空壕の中は負傷者の傷が化膿し、異臭をはなっている。暑さと不潔で傷口は感染を起こし、ウジ虫さえ湧いている。虫の動きで傷も痛むのであろうと、医薬品も十分になく、ただ苦しみを見守るしかない。看護の方法もろくに学習していない私達に一体何ができよう。力の無いことを心の底から反省しました。空襲は激しくなる一方です。広島市や長崎市には原子爆弾が投下され、黒い雨とピカドンと最も恐ろしい光景を住民に残し戦いは終わり、数多くの犠牲者を出し、被爆者は今なお戦後50年を後遺症に苦しんでいる人もある由。

終戦を報じられる天皇陛下のお声も悲しくふるえているかのようにであった。病院の芝生の上や玄関先には職員及び患者さんが報道に耳を傾け、深く頭を垂れ、声もなく泣いていた。一難去ってまた一難。

敗戦国日本となった我が国は、アメリカ軍の支配下となりマッカーサー元帥という人が大きくクローズアップされた。アメリカ兵が上陸したら女性は拉致されるという怖い噂が伝わり、それぞれ山奥へ避難をはじめた。男性は妻や子、老父母を案じながらじっと留守を守っていた。やがてアメリカ兵は進駐して来たが、比較的紳士で、私達が想像していた程こわい人でなく、片言の日本語でむしろ親しみを感じる位であった。様子を陰ながら見ていた村人達も一人二人と里に帰り、元の生活をはじめ準備にとりかかった。が、生活に欠かせない食糧や衣料の不足に大きく悩まされた。生活必需品は全て配給制となり自由に買えない。子供や乳幼児は、たちまちの内に栄養不足で死者も出る始末、誠に悲惨であった。着物は母が大事にしていたヨソ行きをモンペや子供の服に変え、いかにして生活を支えるべきかと苦しんでいた人々の様子が

今でも脳裏に焼きついて離れない。発育盛りの子供がイモガユやカボチャの雑炊で満腹できる筈もなく、青白い顔で母親の後をウロウロしている。病む人も同様十二分な医療も受けられず、病状は悪化するのみで快復の遅れが目立った。効果のある薬品は高価で手が出ない。当時は保険適用ではなく、唯指をくわえているのみであったが、だんだんとその規制も緩和され、徐々に保険使用可能となった。

こうした悪条件も永くは続かず、住みよい国となりました。私も平成4年3月定年を迎え看護職をやめ、これから好きな習い事をしようと予定をたてていたところ、2ヶ月も経たないうちにめまい、歩行困難、骨折、ぶどう膜炎と想像した事のない病気が次々と現出し、入院、手術と約2年間を現在まで過し、その間主人はもちろん妹（義妹）やナースの皆さんに大変お世話になりました。自分自身、入院をしケアを受け感じた事は、何もして貰わなくてよい、誰か傍らにいて欲しい事や何か話をして欲しいと心の底から感じました。今では何とか歩行もできるようになり、バスの乗り降りもできます（ゆっくりと）。少しずつでも快方に向かっており、皆さんへ感謝し、前向きに、明るく過ごすように努力中です。

#### 思い川

看護学生時、教育を通して、私達は国立帖佐療養所で育ちました。が、空襲や防空壕への避難に明けくれているように思います。3年生の勤務は実習生として鹿屋地方病院へ配置となり、食糧事情は悪く、いつも院長先生の差し入れを受け助かっていました。やっと卒業して以前の養成所へ帰り、本当の看護婦として働きました。養成所のすぐ下に、思い川は流れており、満潮時には海水も加わり、夕陽の沈む頃、太陽は真赤に大きくさえ感じました。そのほつりを患者さん達が散歩に連れだつて現われる。楽しそうに話していたり、一人しょんぼりと佇む姿もある。淋しいのだろうか、子供や家族の事が気になるのでしょうか。私はその様子を見て、一生ナースを続けようと決心しました。思い川の辺には戦後間もなく引揚者が収容され、殆どが栄養失調と皮フ病を抱えていた。どうしてかといえば、引揚船より下船の許可が出ず、20日間位身体検査のため停泊していた由。その間の入浴は海につけてひきあげる処置で皮フはカサカサになり、カユくてたまらないとボリボリ搔いていた。そういう人達も気力のある人は生命を取り止めたが、やがて極度の疲労と栄養不足で死亡した。身受け人はほとんどなくというより、不明の人が多く、思い川へ向う途中の空地に埋葬され、数年後に身元のわかり次第引き取られ、故郷の土にやっと眠ることができたのではと思っています。思い川にはこうして複雑な思い出がたくさんあります。今後二度と再び戦争や、内乱が起こらない、平和な国が続くよう祈りたいものです。

病院の全景

